

【長火鉢】

本格的な冬の寒さが到来し、暖かいものが恋しくなる季節となりました。

今月の推しの“イッピン”は、「長火鉢」をご紹介します。この長火鉢は、新婚当時（明治25年）東京府東京市麻布区芝北新門前町（現・東京都港区東麻布）の新居（借家）において使用していたものです。

長火鉢とは、幅2尺（約60cm）以上の長方形で引き出しのある横長の大型火鉢のこと。地方によって形が違い、主に「関東長火鉢（江戸長火鉢）」と「関西長火鉢」に分けられます。火鉢部分の右横に猫板とよばれるスペースがあり、湯呑みや食器などを置くお盆やテーブルの役目も果たします。ここでよく猫が暖を取っていたことからそう呼ばれています。その猫板の下に2～3段の引き出しが付き、火鉢の下にも横に2つ引き出しが並ぶのが一般的。この中に茶、湯のみ、ふきんなどの小物が入ります。引き出しのある側が裏面で、お客様が目にする面が表面です。

現代では関東火鉢ともいわれますが元々は江戸長火鉢。昭和30年ころまでは本当に関東圏にしかありませんでした。

火鉢は奈良時代に登場したとされています。薪を燃やすのと違い煙が出ないことから室内暖房として重宝されました。誕生からしばらくは上流の武家や公家に使われていて、江戸時代から明治時代にかけて庶民にも普及していきました。

庶民に広がって多くの人が使う中で、形やデザイン、装飾にも多様性が生まれ、様々な形状の火鉢が誕生します。

ご紹介した長火鉢は、当館旧宅にて常時展示しております。新婚当時の長火鉢を大切に保管し、岩手でも当時を懐かしみ時々使用していた春子。物想い出を大切にする夫妻の様子が感じられます。



参考：「株式会社増田屋『骨董火鉢・長火鉢』」、
「火鉢の道具店『長火鉢の種類と特徴』」、
「アンティーク家具ラフジュ工房『火鉢とは』」